

(4) 退院後の母乳育児支援の状況

「母乳育児支援を目的とした退院後のサービスがある」と回答したのは、病院では 475 施設 (74.6%)、有床診療所では 63 施設 (40.4%) であった。また、母乳育児支援についての「地域の専門的な資源」については、「積極的に紹介している」施設は 90 施設 (14.1%)、「要望があれば紹介している」施設は 404 施設 (63.4%)、「紹介していない」施設は 136 施設 (21.4%) であった。有床診療所では、順に 24 施設 (15.4%)、87 施設 (55.8%)、39 施設 (25.0%) であった。

紹介先となる地域の資源は図 10 のとおりである。地域との連携については、スタッフの交流や勉強会・講習会へのスタッフの派遣が多く回答されていた (表 9)。

図 10 退院後の紹介先 (複数回答, 回答施設数を母数とした)

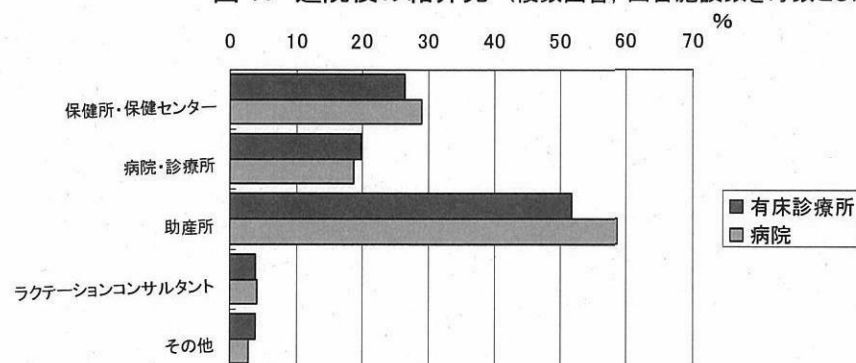


表 9 地域との連携(複数回答)

項目	病院(n=637)		有床診療所(n=156)	
他施設や保健センターとのスタッフの交流	171	(26.8)	27	(17.3)
母乳育児支援に関する連絡会の開催	49	(7.7)	5	(3.2)
母乳育児支援に関する勉強会の開催	129	(20.3)	18	(11.5)
地域の母乳育児支援のネットワークづくり	47	(7.4)	15	(9.6)
地域の母乳育児の講習会への協力	58	(9.1)	23	(14.7)
母乳育児支援に関する研修会へのスタッフの派遣	179	(28.1)	42	(26.9)
母乳育児支援に関する研修の受け入れ	38	(6.0)	19	(12.2)
新生児・産婦訪問の受託	27	(4.2)	4	(2.6)
その他	23	(3.6)	3	(1.9)

注)パーセンテージは回答施設を母数とした値

施設数(%)

資料:平成18年度児童関連サービス調査研究等事業「母乳育児推進に向けた支援方案に関する調査研究」

(主任研究者 谷口千絵)

2 授乳の支援に関する基本的考え方

授乳は、赤ちゃんが「飲みたいと要求」し、その「要求に応じて与える」という両者の関わりが促進されることによって、安定して進行していく。

多くの母親にとっては、初めての授乳、初めての育児といったようにすべてが初めての体験であり、それらに関する情報を得ていたとしても、すぐに思うように対応できるものではない。赤ちゃんに関わりながら、さまざまな方法を繰り返し試しつつ、少しずつ慣れていくことで、安心して対応できるようになる。そうした過程で生じてくるトラブルや不安に対して、適切な支援があれば、対応方法を理解し実践することができ、だんだん自信がもてるようになってくる。

特に、自分の子どもが生まれるまでに小さな子どもを抱いたり遊ばせたりする経験がない、身近に世間話や赤ちゃんの話をしたりする人がいない親の割合が増加する現状^{1) 2)}にあっては、育児支援の観点から、授乳の進行を適切に支援していくことは、母子・親子の健やかな関係づくりに極めて重要な役割を果たす。

授乳の支援にあたっては、母子の健康の維持とともに、健やかな母子・親子関係の形成を促し、育児に自信をもたせることを基本とする。また、妊娠中から退院後まで継続した支援、産科施設や小児科施設、保健所・市町村保健センターなど地域のすべての保健医療従事者における支援に関する基本的情報の共有化、社会全体で支援を進める環境づくりが推進されることをねらいとする。

授乳については、妊娠中から「母乳で育てたい」と思う割合が96%に達し、「母乳育児」を実現していくための支援も重要である。母乳育児には、①感染症の発症及び重症度の低下②乳児に最適な成分組成で少ない代謝負担③出産後の母体の回復の促進④母子関係の良好な形成などの利点があげられる。近年では、母乳栄養とその後の肥満発症との関連を検討した研究で、母乳栄養児の方が人工栄養児に比べ肥満となるリスクが低くなるという報告もみられている^{3) 4)}。

母乳育児の支援にあたっては、その目標は子どもを健やかに育てることであり、単に母乳栄養の向上や乳房管理の向上のみを目指すものではない。母乳育児をスムーズに行うことのできる環境（支援）を提供することが求められる。

一方で、近年、低出生体重児の割合などが増加しており、授乳にあたって個別の配慮が必要なケースへのきめ細かな支援も重要である。